



海外留学の方向性 浅井宏純氏へのインタビュー

Timothy Newfields



浅井 宏純 (あさい ひろずみ) 氏

プロフィール:

1974年渡米、パイロットを目指しウエスト・ロサンゼルス・カレッジに入学。1978年同校卒業。

帰国後、(株)海外教育コンサルタンツ(EDIC)に入社。北米、欧州の留学事業に33年間携わる。同社代表取締役社長に就任。

2008年、EDICを委任譲渡し、アフリカに渡る。13カ国の仲間と大型トラックで10ヶ月間かけ、アフリカ大陸を一周。

2010年EDIC顧問を退職。クラス・アフロート(世界を旅するカナダ洋上高校)前日本代表。NPO法人「未来の学校」理事。

著書に『アフリカ大陸一周ツアー』(幻冬舎新書)、『知っておきたい!海外留学の理想と現実』(岩波新書)、『小・中学生の海外留学事情』(講談社プラスアルファ新書)などがある。

海外留学コンサルタントとして30年以上、お仕事を続けてこられ、浅井さんは海外留学をする日本人の変化に気付いていらっしゃいますか?

日本で海外留学が広まっていったのは1975年頃からです。それから30年。留学業界の仲間では話題となるのが、留学の中身が大きく変わって来たということです。

変化を挙げるとしたら次の3点です。

(1) 留学先の多様化

90年以降、留学先の多様化がはじまりました。定番であった、イギリスだけでなく、国策として留学生招致に力を入れてきたカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどに留学する日本人が増えました。

さらに21世紀に入ると、マルタ、フィリピン、フィジーなどの国にも日本人は留学している。

(2) プログラムの多様化

昔は、留学というと、一定期間海外で教育を受けること、研究に携わること、と考えられていました。最近の留学は、期間にかかわらずプログラムに「学び」があれば留学と呼ぶようになりました。

90年代までは、語学留学、学部留学、大学院留学と明確にタイプが分かれていました。しかし現在は、語学を勉強してから条件付きの入学が認められるプログラム。語学留学だけでなく、語学留学プラスアルファが学べるプログラム。例えばスポーツ、ダンス、芸術、ネイル、フラなどを学ぶプログラムです。親子留学もあれば、語学研修のないサーフィンや乗馬留学もある。またインターンシップを絡めた留学も人気です。

(3) 留学イコール学位取得では無い

語学留学が多様化、「旅行化」している。参加者のハードルが精神面でも費用などの物理面でもだいぶ下り、気軽なものになっています。海外の大学に留学する場合も留学先の学位取得ではなく、日本の大学との交換留学、認定留学として1年間のみ留学するパターンが増加しています。今後も1年間のみ留学パターンは、増加するでしょう。

短期留学プログラムを単なる観光旅行だと批判する意見もありますが、どう思われますか。

単なる観光旅行でもいいから、若者はどんどん世界を見に行ってほしい。留学は「厳しいもの」「学位をとるもの」といった先入観は捨てた方がいい。留学の目的が多様化する中、そのような固定観念は、時代遅れになっています。



留学後のフォローアップレッスンをしない学校があります。そのため留学中に習得した語学力を維持できない生徒を多く見かけます。そのことについてどう思われますか？

大学でフォローアップレッスンがないのは、大学側のカリキュラムの組み方に問題があると思います。民間のプログラムには、フォローアップレッスンを提供する機関はたくさんあります。当然費用もかかります。

そもそも、留学生は帰国後どのようなフォローアップレッスンを受けたいのか、しっかりしたビジョンを持つべきです。留学中にやる気をもって臨んだ学生は、帰国後、習得した語学力を維持する勉強法を自分自身で見つけます。また、留学後、やる気のない学生をフォローアッププログラムに無理矢理参加させることには、疑問の余地があります。

留学に対する日本人の誤った捉え方、認識についてどうお考えですか？

誤った捉え方というより、日本の「留学」の定義は、とても曖昧なニュアンスで捉えられています。誤った捉え方と言えば、先進国の方がその他の国より、優れているという考えです。こういった考えは捨てる必要があります。それぞれの国が持つ文化の価値は、単純な判断基準では分かりません。誤った捉え方の例を下記にあげてみます。

例 1. 職業を聞かれ、私が「留学の仕事です」と答えると、「ホームステイですね」と言われます。留学とホームステイを同一に考えている人が多いことです。

例 2. 「成績が悪くだけで退学させられるのはおかしい。まして帰国させるなんてどういうこと?!」と、親からクレームを受けたことがあります。日本では、成績が悪くても退学させられることは滅多にありませんが海外の大学ではよくあることです。留学生が退学させられた場合、自動的に学生ビザも失います。日本に帰国せざるを得ません。海外で学ぶ日本人学生に、学業平均値が一定基準を下回ったらどうなるか、事前に伝えても理解されないケースが多いです。

例 3. 海外の教育レベルが日本より低いと思っていちゃいます。特に中・高の数学のレベルが日本より低いのではないかと心配するケースがよくありました。今ではこのような懸念は減っています。

2005年の御著書についてお尋ねします。

「留学をすると国際性が育つのか、外国人との違いが理解できるのか（中略）他の文化に先入観を持たないようにするには、かなり努力が必要です。国際性を身につけるには、先入観を持たないことが重要です。」（P.24）と、ありますが、浅井さんのおっしゃる国際性とはどのようなもののでしょうか。

私の言う国際性とは、敬意と好奇心をもって海外（異文化）に目をむけると同時に、自国の文化を理解することです。人は自分の親と生まれる場所を選ぶことはできません。国際性を養うためには、自己をはっきりと表現することができ、他国の人たちの様々な価値観も尊重できることが必要です。

ごく普通の家庭に育ち、親が海外経験がなくても国際性は育ちます。外国語や海外の文化に興味を持つことで、インターネットを通じて外国人とコミュニケーションを図ったり、海外から JETs プログラムで来られた英語の先生と進んで交流を持つことでも国際性は育つと思います。大人でも、留学しなくても、本来国際性は身につくと考えます。

同書の中で、「国内で開催される国際交流は、日本人向けの企画だと思います。（中略）日本にいる外国人のためではなく、日本人が海外で困らないようにするための催しでは、決して日本人の国際性は育たないと感じています。」（P.25）とあります。日本で真の国際性を育てるための催しをするならば、どのような内容が良いとお考えになりますか？



日本の大学は国際交流の仕方に迷いがあります。国際的と言われる催しのほとんどが、日本人学生に「日本がいかに恵まれている国」かを思い起こさせるものです。より良い国際交流について、私は3つ提案があります。

- (1)大学にサマースクールプログラムを作る。例えば、留学生(外国人)と日本人学生が二人一組になって活動するバス旅行もいいでしょう。理想は1週間ですが、一泊二日でも、行き先はどこでも構いません。キャンプ、東京見物、震災被災地訪問、他の大学との交換訪問などが考えられます。費用は留学生が自分で払える範囲内で、できるだけ安く抑えることです。食べ物は、水とオニギリや缶詰で十分です。大学の駐車場、公園、河原など電気・水道・ガスがない所で泊まる経験はとても良いと考えます。日本は便利さであふれています。この地球上には、電化製品を持ってない人々がいることに気づいて欲しいです。旅行中、旅行で得た経験を発表しあうことで、お互いの違いを実際に知ることができます。人は一つ屋根の下で生活を共にすると、不思議と互いに理解し合えるものです。
- (2)大学の学費のためにアルバイトをする留学生と日本人学生が共に働く。短期間でも彼らと一緒に働くことができれば、得るものは多いでしょう。
- (3)日本の学生が日本語を(安くまたは無料で)世界の人に教える。教えることで異文化を学び友好関係を築くことができます。フェイスブックなどですでに海外の仲間と交流する学生もいます。このような活動は日本語を学ぶ興味を刺激するだけでなく、海外にいる日本人学生のイメージをも高めます。

「日本にいると普通のこと、外国に行って初めてそうでないと気づくことがあります。(中略)留学生が国際的であるかどうかは、日本を出る前に受けた日本でのしつけや教育によるところが大きい。」(P.25)とありますが、留学前に学生に必要な教育、またはしつけとはどのようなもののでしょうか?また、留学プログラムを作る上で何を重要視すればよいとお考えですか。

日本では当然でも、アフリカでは電気・水道・ガスのない生活を送っている人がほとんどです。海外に行く日本人には、見知らぬ人にも礼儀正しく挨拶できるよう基本的なエチケットを身につけてほしい。また、誰に対しても約束を守ると言う誠実さも必要です。このようなことが、日本人にとって当たり前になればうれしく思います。留学する人には、次に述べることを渡航前に身につけてもらいたいと考えます。

(1)挨拶ができる。年配者を敬える。

スムーズにコミュニケーションを図るために、ありがとうございます。いただきます。ごちそうさま。おはようございます。おやすみなさい。ごめんなさいをどのように使うか、考える必要があります。日々の生活の中で礼儀正しさを示していくことは、大切なことです。

広島県の協力を得て、「世界を旅する学校クラスアフロート」の催しを行いました。一週間ほど、日本に招待し、世界中から20名ほどの中高生が集まりました。とりわけカナダの生徒が、皆に礼儀正しく挨拶をしていました。彼らは、広島路面電車に乗ると、年配の人にすぐ席をゆずっていました。それを見た広島県の先生が「近頃の日本の若者にはなかなかできないことね。」と感心していました。クラスアフロートの学生は、多くの国を訪問するので、どのようにすれば受け入れてもらえるのか、知っているのです。

(2)約束を守る。時間に正確。我慢(辛抱)できる。

朝きちんと起き、身綺麗にすること。自分に自信を持つことは、留学に際し重要です。最近、イギリスの学校の校長先生から「最近の日本の生徒は、じっとしていことができなくて、どこでもしゃがんだり、ズボンをズラして履いている。だらしが無い」と聞かされ、ショックと同時にとても失望させられました。

(3)人を疑う能力(判断力)を養うこと(これは、日本人に欠けていることです。)

担当した学生(中高生)で、学校内で所持品をよく盗まれ、お金を貸して返ってこなかったことがありました。彼はスイスの名門校に通っていたのですが、先生から「たとえルームメイトであっても気をつけてください。」と言われました。日本人はよく詐欺師に狙われやすいと思われています。



もう一つは、イタリアのインターナショナルスクールに通っていた女子学生の例です。男子学生に甘い言葉で誘われ、結局利用され、傷ついてしまいました。自分を不幸な状況に陥らせないためにも、しっかりした判断が女子学生は特に必要です。自分が出会った状況をしっかり判断でき、サバイバル術を身につけてほしいのです。また、失礼にならない程度に、はっきりと「NO」が言えることも必要です。

「インターネットや携帯電話の普及により、コミュニケーションのありかたがすっかり変わってしまいました。パソコンやメールに依存しないと、自分の考えが伝えられない学生が出てきたのです。」(P.48)と、留学先での些細なことを携帯ですぐ日本の親に伝え、親がエージェントに文句を言って介入する事例が紹介されていました。留学しても日本人の友達にメールしたり、日本の親に通話ばかりしては、留学する意味がありません。携帯電話についての対処方法をどうお考えになりますか？

私も対処方法は分かりません。学生たちが携帯を使いすぎないための方策は今まででもとってきました。例えば、全寮制のスイスの学校では携帯の使用を全面禁止していました。学生たちには何らかの規制が必要だと思います。

また、親がもっと賢くなる必要があります。子供を甘やかさず、子供たちの要求にすぐに応じないことです。EDICMのスタッフとは、ここに話が落ち着きました。

留学のリスク管理についてですが、親は現地の治安や麻薬、暴力について心配しがちです。しかし、それとは違うリスクとして、留学生がやる気を失いニートになる(P.55)可能性があると言われていますね。これについて教えてください。

留学生が学校に通わなければ当然、学生ビザは失います。1980年代から日本では子供たちの登校拒否の問題が深刻になりました。この頃は、不登校といわれた生徒をたくさんお世話しました。今でも私自身は、不登校であっても本人が望めば留学することは良いことだと信じています。自ら留学したいなら応援したい。海外で高校や大学を卒業した学生も多くいるし、親が喜ぶような成功例はたくさんあります。

自分の子供に家でぶらぶらしていないで、学校に行ってほしいと願っている親がいれば、学校に行きたくなければ、行かなくていいと言う親もいます。後者は、子が留学先で不登校になっても平気です。親が「いいよ」というのですから・・・それでも、親は子が日本にいるより海外にいることを望みました。こういう場合、お金の要求以外に連絡がとれず、挙げ句に親から依頼を受け、私がアメリカに学生を迎えに行ったことが幾度かありました。たいていこのような学生は何もせず、日本人の仲間と一日中アパートにいました。ビザが切れていたのが不法滞在で帰国しなければなりませんでした。他の留学コンサルタントとこの問題について話しましたが、彼らも海外にかなりの数のニートがいると話していました。

私は本当にやることなく、退屈すれば、人は本を読んだりスポーツをすると思っていました。しかし、インターネットとゲームがあれば、ひきこもる人が多いことを知ったのもこの時です。お金が続く限りひきこもり生活をしている人は数多くいます。このような生活をしていても、それほど心配しない両親もいます。

浅井さんは「留学とはお金を出して、苦勞を買いに行くもの(p. 87)」と書かれています。苦勞について学生に留学前にアドバイスするとしたらどのようなことをされますか？

かつて、アメリカ留学の草分けである初期のフルブライト留学生の方々に話を伺ったことがあります。\$1=¥360固定相場の頃です。皆さんは、働きながら勉強され、相当苦勞されたようですが、「今となっては、よい思い出」とおっしゃっていました。

これから留学する大学生に「留学するとどんなことで苦勞すると思う？」と聞くのですが、たいていは、ただ楽しむことだけを考えているようです。日本人には「苦勞に価値を見出す」と言う考えは、なくなりつつあるように感じます。留学は苦勞を乗り越えられる生徒にこそ、してもらいたいと思います。

日本は世界でも生活水準が高いので、日本はどこよりも便利だと思いがちです。しかし最近、友人が「日本は、他の国より不便だ」と言っていました。不便かどうかは、それぞれの育った環境によるようです。最初は満足しないかもしれませんが、まもなく不便に慣れます。私自身は、ア



フリカで方々旅行したので、いまでは飲める水があるだけラッキーだと思うようになりました。人は何にでも慣れることができると思います。

「受け入れる海外の学校は、自立した責任ある大人が来ていると判断しています。しかし、じつのところ、現在の日本では18歳でも自立した大人になっていない人が多く留学しているのです。」(p.126)とあります。そうした未成熟な大学生の留学をサポートするには何が重要で、また渡航前にどのようなことを、教えておく必要があるとお考えですか。

この本を書いてから、「18歳は未成熟で当たり前」という考えに変わりました。しかし、私は、物理的に親から離れることが自立の一步と考えるので、海外留学は未成年が自立のため(修行)にもってこいだと思っています。「家出するくらいの気持ちで飛び出せ」ですかね？

**御著書の中で、英語力がつかない人の理由を3つをあげていらっしゃいますね(P.128)。
①留学ではなく遊学になっている。②留学期間(予算)が明確でない。③実際の語学力をTOEICやTOEFLなどの点で評価することは難しい。このような問題をどのように考えればよいでしょうか。**

留学で語学力が身につくかどうかは、しっかりした動機があるかどうかです。バブル期の金余り時代には多くの学生が留学し、かなりの数の学生がただ遊び回っただけで終わりました。しかし、ここ数年、当たり前のように就職で英検やTOEICの点数が要求され、必死で学ぶ学生が増えてきました。留学機関や英語学校経営者の仲間から聞くには、「やる気のある人は、留学しなくても英語力を身につけている」そうです。近年は親の経済事情が厳しいので、学生のハングリー精神が蘇ってきていると聞き、嬉しいことです。

御著書の中で、留学を成功させる学生の条件は、語学の点数以外に①社会的常識、礼儀をわきまえていること。②プラス思考であること。発見を楽しもうとしていること。③日本を不用意に持ち込まず、相手の文化をまず尊重することだとおっしゃっていますが、このご意見は今も変化はありませんか？

基本的に変化ありません。ただ、書いておきながら”今の社会的常識”が何なのか私自身が説明できなくなっているのが、最近はこのような質問を受けると、次のように答えています。

①+③=敬意をもって人々や外国に接すること。

②=好奇心が旺盛であること。

留学は自分自身や家族のためだけでなく、日本のためにある。日本は世界のためにある。と私は思います、志を持つ人は、それだけで「成功」です。そして、たとえ挫折や失敗があったとしても、留学先から元気に日本に帰ってくれば「大成功」である、と信じています。

参考文献

- 浅井宏純 2002 『小・中学生の海外留学事情—親と子の自立をめざして』 講談社プラスアルファ新書
浅井宏純 2005 『知っておきたい!海外留学の理想と現実』 岩波書店
浅井宏純 2010 『ぼくの見たAFRICA』 <http://boku-africa.sblo.jp/>
浅井宏純 2011 『アフリカ一周大陸ツアー』 冬幻舎新書
浅井宏純, 森本和子 2005 『ニートといわれる人々自分の子供をニートにさせない方法』 宝島社
『未来の学校新聞』(2007年11月 未来の学校新聞 第2号) http://futureschool.heteml.jp/themes/FS_our_files/newsletter_J2.pdf

(本稿は、2011年10月21日に行なわれたインタビューとメールのやりとりで構成した。)